

伴野京治生誕 130年

二枚橋に生まれ
二枚橋に死なんとする

明治30(1897)年生
令和9(2027年)、生誕130年を迎えるにあたり

はじめて

「区史二枚橋」より



郷土史研究の大先達
伴野京治氏

氏の労作「二枚橋について」の前書きの最後に、二枚橋についての深い愛着と心情を残している。

伴野京治氏は昭和八年設立の北駿郷土史研究会の中心的な存在として活躍し、北駿有数の郷土史研究者としてその名を馳せた。

氏は深い洞察力と豊かな知識、忍耐強く史実のなにかを追求する探究心、実地踏査に裏付けられた確かな推論を通して郷土史の資料発掘にかかわってきた。

難解な古文書の解読と読み下し、未解決の古文書の数々に光をあて、歴史の舞台の上で甦らせ、それらの歴史的価値や意義を探る多くの手がかりを広く世に公開した。

恐らく寝食も時には忘れ、ひたすら机に向かい「ガリガリガリ」と冷たい鉄筆を握り締めて、古文書の世界に没頭し、著していったのであろう。

絶筆となった「御殿場の古文書」には「この岡神社文書」「神山文書」「芹沢将監文書」など、七十点に及ぶ貴重な文書を紹介している。

「御殿場市史編纂は、伴野京治氏の四十年にも及ぶ献身的な研究と収集の資料や解明の賜物として発刊の暁を見たのだ」と氏の業績を高く評価する歴史学専門家が圧倒的だ。

絶筆となった「御殿場古文書」は文章が途中で途切れた箇所もあったりしたが、あえて氏の功績に込める意味をこめて「編集者註 以下絶筆」と記されている。

御殿場市文化財審議会会長の現職のまま、郷土研究への多くの構想を胸にしたまま他界されたのが残念でならない。

(昭和四十年五月二十二日 御逝去 六十八歳)

二枚橋広報「公民館だより」でもおなじみの郷土史家、三・一組の三井明さんより、郷土史研究に偉大な功績を残した伴野京治氏の生誕百三十年を迎えるにあたり、その功績を皆様にご紹介して欲しいとのご依頼が届きました。

伴野京治氏は北駿地方研究の第一人者で、全三十五巻に及ぶ論文や調査資料を残しています。(市立図書館蔵)

三井さんは、区史編纂や様々な歴史研究を通して氏の偉業を礼賛し、現存する資料の全目録を整理し、地域の郷土史研究に便宜を図ろうと長年取り組んでいらっしやいます。

広報委員会では、三井さんが作成した目録や資料を文字起こしするとともに様々な出典を確認し、改めて先達の業績に思いを馳せ、郷土史を受け継いでいくことの重要性を再認識いたしました。

この資料が、ひとりのでも多くの区民の皆様にご覧いただければ幸いです。

【二枚橋広報委員会】



御殿場市立図書館蔵「伴野京治調査資料文献目録より
「北駿小誌」「二枚橋について」「勝又勝美翁」

北駿郷土史研究資料目録

昭和 42	昭和 40	昭和 39	昭和 39	昭和 38	昭和 38	昭和 37	昭和 37	昭和 37	昭和 36	昭和 36	昭和 36	昭和 36	昭和 35	昭和 35	昭和 35	昭和 34	昭和 34	昭和 34	昭和 33	昭和 33	昭和 32	昭和 31	昭和 31	昭和 30	昭和 30	昭和 29	昭和 29	昭和 29	昭和 26	昭和 15	昭和 13	昭和 12	昭和 12	昭和 10	昭和 10	昭和 10	昭和 9	昭和 9	昭和 7	昭和 4	大正 10							
富士山の大噴火と御殿場の古代文化の論文掲載 執筆中に急逝 未完のまま出版	御殿場の古文書 (未完)	中畑ろくろ師文書	天明の御厨一揆顛末	竹の下戦没取調書	滝口源太郎関連文書	東海道原助郷記録 (近隣助郷記録)	新橋鈴木家文書切支丹に関する文章	遺跡地名表 (御殿場小山裾野)	宝永の噴火と北駿文書	御殿場市の指定文化財	御殿場市小山町小字名鑑	御殿場市郷土芸能	横走り研究集	駿河志料	駿国雑志 (御殿場周辺抜粋)	富士山東面口略縁起	深澤城研究資料	北駿の郷土誌	郷土年表	東富士入会地争論記録	東富士入会地分割記録	深澤城史跡指定申請書	深澤城乃木希典「観駿州深澤古城」誌について	護国 (御殿場市内戦没者名鑑)	勝又勝美翁	御殿場市中田遺跡について	二枚橋について (現区史の原本)	東山の開拓	大東亜戦争に供出せる梵鐘銘	深澤城	北駿の古文書	北駿小誌	北駿の郷土史	用沢延命地藏由来	河村城跡史跡指定之願	河村研究資料 (ある委員の記録)	北駿小誌	御厨	御殿場における西南の役従軍者	阿多野神殿開拓文書	御殿場地方竹行李の由来	御殿場町小字名鑑	竹之下宝鏡寺御本尊縁起	伴野佐吉翁遺徳	二枚橋古墳について	富士山と富士五湖	富士裾野土地使用に関する演習場沿革	遺徳集稿 (富士岡村)

出版発表年不明文書

大森氏研究資料 北駿領主研究
 富士山表東口開鑿に関する記録
 御殿場町忠霊目録（御殿場の部）
 江戸幕府重職一覽表 帝国海軍の最後

町村所有文書調査（写）調査年

昭和 37	富士岡村誌
昭和 38	北郷村沿革誌 高根村誌 原里村沿革誌
昭和 39	印野村誌
昭和 40	小山町誌 須山村誌 足柄村誌 御殿場町誌 須走村誌

各区所保有文書調査（写）

昭和 31	東山区
昭和 32	西田中区 東田中区 中畑区
昭和 33	杉名沢区 新橋区 北久原区 沼田区 川島田区
昭和 34	印野区 古沢区 新橋区 中丸区 萩蕪区 大堰区
昭和 35	萩原区 神場区 六日市場区 栢の木区 鮎沢区 板妻区 竈区
年代不明	諸久保区 中清水区

旧家所蔵古文書調査（写）

昭和 31	小倉野新田村上家 杉本家鎌野家
昭和 32	御殿場星屋家
昭和 35	中山小澤家 菅沼湯山家 仁杉勝又家 新橋鈴木家
昭和 38	鮎沢勝又家 二子坂口土屋家 諸久保小松家 萩原芹沢家
年代不明	下古城鈴木家 小山町岩田家 印野池田家 水田野林家

（以上伴野京治論文研究資料三十五巻より）



御殿場市立図書館レファレンス室に
 ずらっと並んだ資料。申し出れば、
 いつでも手に取ることができます

伴野京治氏の労作
 「二枚橋について」発刊

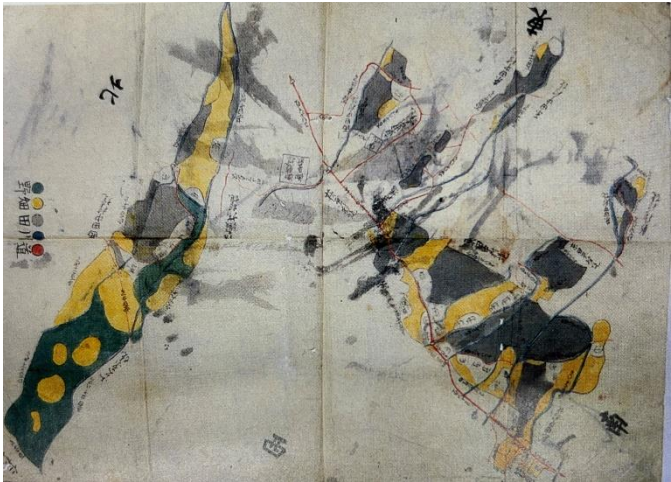
昭和三十一年八月「二枚橋に生まれ、二枚橋に死なんとする。」と、最後の行をまとめた、ふるさとの生んだ偉大な郷土史研究家の伴野京治氏の労作「二枚橋について」が発刊された。

氏はこの発刊に至るまでの二十数年間、埋もれた史料の収集や解読に情熱を注ぎ、「後から研究する人の参考資料にして戴くこと」と念願し、謄写版刷り百十頁に及ぶ研究書にまとめた。

この研究書の表題の傍の著者名は「北駿郷土研究会」としてあるが、氏の謙虚さの一面をみだ思いがする。安田絵図といわれる古地図の転写の作業も大変なことであつたらうし、しかも土地利用の状況の着色までしてあるのだ。

この「二枚橋について」限定一〇〇部の研究書があつて、はじめてこの区史の発刊があげたのである。

（「区史二枚橋」より）



伴野京治氏が転写した「安田地図」。
 他の地区のものと同年代のものと考えられ、東田中絵図には延宝5年11月安田勘左衛門とある。

百瀬 恵造

伴野京治のエピソード

祖父が死亡したのは私が小学校1年の5月22日です。祖父の記憶の殆どは幼稚園時代のものですが、祖父の家には良く遊びに行っており、はっきりと記憶に残っている祖父の様子などを書きます。

- 1 小さい机で、時々何かを書いていた
- 2 銅銭をファイルに整理していた
- 3 小さい机を挟んで新田次郎らしき人に説明していた
- 4 祖父に「大昔の下土狩に大きな駅があったんでしょ」と言ったこと
- 5 祖父死亡の連絡を受け取った時の事
- 6 死亡の翌朝の事
- 7 翌年のお盆？お彼岸？
- 8 祖父の死亡場所へ行く

(伴野氏のお孫さんが寄せてくださったエピソード
詳細はコミセン展示とホームページ版に掲載)

一枚橋に生れ、一枚橋に育ち、一枚橋に死なんとする

筆者 伴野京治

たから勢ひ勝又氏の源を知る事に...
清和源氏とあり 武田の支流となり...
起すや勝田平三成長は全同横龍入郎兵衛と計り頼朝に加...
其後遠江守安由義定(武田支流)に従ひ下...
武原の大名と列じ頼朝入洛の際 又頼朝北條...
武原の事あり 安由義定の事は百四十年 高時...
之 中知勝又氏の祖

保存されている執筆 : 謄写版刷り (ガリ版印刷)

あとがき

区史二枚橋発刊の時から今日まで伴野京治氏の全関係文書のリストを作成したいと思ってきました。

区史二枚橋が発刊できたのも、氏の貴重な資料があったればこそと感謝の思いを忘れたことはありません。

以来二十年、ようやくまとめることができましたが、残念ながら完璧とは言えません。

自分のできる最善を尽くせたかとは思いますが、

「ふるさとを愛するが故に郷土史を学ぶのだ」

氏の情熱あふれる言葉が怠惰な心を突き動かしてくれました。

市立図書館の御協力にも心から感謝して。

令和六年八月十日 三井明

結功可其薄疎無之住所に迷ひ難哉住矣且又拾七年以前で
帳元明主院と御厨と神主赤宣四人之内土佐儀宗女と申矣
祈願出入に於て御奉行所御令味と上御裁許證文ニも神職
もの佛者之形相にて徘徊不仕修験之家業と坊申間敷旨
被仰付置矣且那場と申上又、枕字於矣札を家々
證文之趣相背修験藏相坊誘迷忍仕矣間上在並也
左近被召出御令味奉願之旨被備共御討訟申上矣付双
御内寄合席におゐて被送御礼明矣且土佐申上矣、宗
當山方修験にて甥矣得者追放申付矣儀者勿論家敗
何之故を以欠所可仕譯全無御屋矣作御殿町に神送り
仕矣翌朝宗山宅、土佐罷越左權、初精も仕矣者伴左近
相談仕可然と申矣途にて帰宅仕矣其跡にて宗山儀居
鎧と掛ケ罷出一両日も不立歸矣付火之元並盜賊爲用心
宗山居宅前仕進にて結切置矣題名主友右門八郎左
宗山罷越其段相連矣付名主方左近と稱爲立席可然
申間矣間全追出矣、宗山無之旨及挨拶早々竹廻取拂
右と通して家敗等之儀曾て不奉存矣由主左左申上矣

保存されている執筆 : カーボン紙

宗山追放、相成矣證據之儀御尋被得矣得天證據可申上
無之矣併宗山罷出矣跡を何方にも無断土佐竹廻にて結切
宗山爲立席間敷仕方、被思矣、宗山且日那、之居候にまの
批僧共初精を執行以上、伯父甥、間柄、矣夫社家修験
別職、矣得者行法之事業におゐて左近、可途相談筋
無之思不能談合矣と答矣申分たう、ハ宗山住所と
追出矣矣證據無之矣天理不盡仕方有間敷儀と不
思、宗山由承、下宗山、文書、

伴野京治のエピソード

百瀬 恵造（伴野氏のお孫さん）

祖父が死亡したのは私が小学校 1 年の 5 月 22 日です。祖父の記憶のほとんどは幼稚園時代のもですが、祖父の家にはよく遊びに行っており、はっきりと記憶に残っている祖父の様子などを書きます。

1 小さい机で時々、何かを書いていた。

寝室で座布団に座って（あぐらか正座は不明）小さい机で何かを書いているのを何度か見掛けている。1 度だけ「何を書いてんの?」と聞いたが、迷惑そうな感じだったので、それっきりとなってしまった。

歴史関係の史料をまとめたり、原稿を書いていたのだと思う。

5 祖父死亡の連絡を受け取った時のこと。

昭和 40 年 5 月 22 日、その日は祖父の家に泊まることになっていました。既に外は真っ暗であとは布団に入るだけという時に、男の人が玄関に来ました。孫であるきーちゃんが「はい」と玄関へ行きました。男の人の言葉を聞いたきーちゃんが、目に涙をためながら「おじいちゃんが死んじゃったー!」と大人達がいる台所の方へ走って知らせました。

普段なら 1 階で寝るはずでしたが、「布団を持って 2 階で寝ろ」と言われ、2 階で寝ました。

2 銅銭をファイルに整理していた。

こたつの部屋（居間）で、穴の開いた厚紙に、丸くて濃い緑色で真ん中に四角い穴の開いた物をはめ込んでいた。銅銭を整理していたと思う。

※ マメ知識

日本に銅銭が伝わって、しばらくの間は全て中国からの輸入でした。和同開珎が日本で初めて作られた銅銭です。秩父市で自然銅が発見され、年号が「和銅」（和〔日の本〕の国の銅?）に改められました。最近話題になっていますが、約 10 年程前に南鳥島近海海底でマンガンジュール（ボール状のマンガン）が海底一面を埋め尽くしているのが発見されました。それと同じように大昔海底だった秩父に銅のボールが沢山あり、隆起によって地上に姿を現しました。露天掘りと言うより最初は「露天拾い」だったと思います。

6 死亡の翌朝のこと。

目が覚め、階段を降りる時にいつもと違うことに気付きました。いつもは祖母と頭を富士山側にして 2 つの布団が敷いてあったのに、その日は布団が頭を北にして 1 つだけで、祖父がまだ寝ているようでした。近づくと顔に白い布がかかっていたので、それをめくると祖父でした。「そうか、おじいちゃんは死んじゃったんだ」と理解しました。

その後、近所の人達が集まってきて祖父の周りに座っていましたが、何度も祖父の顔を見に行きました。その都度祖母が白い布をめくって見せてくれましたが、何度も見に行っただけで祖母が「もう、これが最後ね。」と言ったので、「あとでもう 1 回見せて。そうでないと顔を忘れてしまうから。」と、もう 1 回見せてもらいました。

3 小さい机を挟んで新田次郎らしき人に説明していた。

ある日祖父の家に入ると「今日は偉い人が来ているから、2 階で静かにしているか、外で遊んで」といわれましたが、喉が渴いていたので台所で水を飲みに行く時に見ました。

その人は背中を向けていたので顔まで見ることはできませんでした。座布団に正座して祖父の話聞いていました。

後年「怒る富士」を読んだ時、巻末のあとがきに伴野京治の史料がとても参考になった旨書いてあったので、あの時の人が新田次郎だと強引に思うことにしました。

強引の理由は、その人は正座していたけど背が高そうで痩せ型でした。当時の新田次郎は小太りな感じだったと思うので、おそらく別の人ではないかと思っています。

7 翌年のお盆？ 彼岸？

お寺に行っていないので、お盆か彼岸の頃だと思います。祖父の子供達、孫達全員が集まっていたのですが、雨だったので誰も墓参りに行こうとしませんでした。祖父の長男（元由おじさん）が「俺1人で行くけど、誰が行くか?」と言ったので「僕が行く」と言い、急いで合羽を着て、オートバイの後ろに乗ってお墓参りに行きました。

8 祖父の死亡場所へ行く

死亡2年後ぐらいに、父母と3人で祖父の死亡したと思われる場所へ行きました。

新柴の円通寺の上にあるヌタ原の金時山側らしいです。祖父は落を獲りに行って心臓マヒ（心不全）で死亡しました。

その現場付近に行くと、大きな葉っぱの長い落が沢山生えていました。父母は一所懸命に落を獲っていました。花も線香も持たず、最初から落目当てだったのかもと「何だよ!」と思いました。

4 祖父に「大昔の下土狩に大きな駅があったんでしょ」と言ったこと。

北駿の歴史をかじった人が聞いたら、「長倉駅が下土狩付近にあったのだから、駅路が十里木越えをしているはずがない」と祖父の横走関印野説を否定したことになります。

しかし、当時の私は、「御殿場線が東海道線だった頃の下土狩駅は大きな駅だった」ことしか知りませんでした。なのにどうしてこんな言い間違いをしたのか？ 祖父が簡単な地図を書いて、「江戸時代の東海道は今の国道1号線の所を通っていたけど、もっと大昔の東海道は十里木を越えて御殿場を通り足柄峠を越えて向こうに行っていた」と言いましたが、その時に「駅路」、「駅があった」等の祖父の言葉につられて上記のようなことを言ったのだと思います。しかし正確に説明できていません。十里木越え説を否定した静岡県史編纂委員だった皆川剛六が、私の口をして言わしめたとすることでやっと説明できます。

これを言われた祖父の顔は、困ったような顔をして黙ってしまいました。

私が皆川剛六の事を知るのは、この時より20年以上経ってからです。

※このエピソードは祖父の功績を害するかもしれないので、書いたけど無視しましょう。

今回の論文も、十里木越えを完全に否定することから始まっています。当時の歴史研究は文献研究（史料絶対主義）だったので、史料に書いてあれば「そうなのだ」とするしかなかったと思います。昭和末期まで駅路十里木越え説が信じられていた原因が、もし祖父にあるとするなら、それを否定する（否定出来る、否定しなければならない）のは、祖父のDNAを継承している私がする（私しか出来ない、私がしなければならない）事だと思います。

以上、伴野氏のお孫さんである百瀬恵造さんが寄せてくださった伴野氏のエピソードです。

百瀬さんの記述の通り、4番目のエピソードは無視しようかと思いましたが、百瀬さんも郷土史を研究されており、この度その成果が表彰されました。

このように、伴野氏のDNAが脈々と受け繋がれていることをお伝えしたく、掲載することにいたしました。